



放牧で 経営改善 8

ノシバのグリーン
には土佐褐毛和種
のびわ色が映える

たった60本のランナーを植えただけで
90aのノシバ草地

減反棚田で周年放牧

高知県・安部秀雄さん

工藤 育

じつはこのノシバ草地、造成の際の手間や経費はほとんどかかっていません。ノシバの植え付けや除草といった作業はありましたが、それも微々たる

ゴルフ場か？ 庭園か？
見事なノシバ草地
高知県奈半利町の安部秀雄さん（六
歳）は、稻作と柑橘類、土佐褐毛和
種の繁殖を嘗む複合経営。平成二年か
ら減反棚田にノシバ草地を造成し、周
年放牧を行なっています。

安部さんの放牧地は、自宅から三
kmほど離れた、標高二二〇mの太平
洋を望む南向き斜面にあります。転作
面積は六五aで、法面や畦畔を含める
と約一haの広さ。「ここはゴルフ場か
と聞かれることがある」と、安部さん
が自慢するとおり、芝刈り機を使って
も、これほどフラットな芝面をつくる
ことは難しいのではないかと思わせる
ほど見事な草地です。

もので、あとはすべて牛任せ。

「ここは牛らが丹精込めてこしらえた牧草地じゃきにな」と、安部さんは言います。

鮮やかなグリーンの絨緞の上で、びわ色に似た毛の土佐褐毛和種が、のんびりと草を食みます。はるかかなたには、いぶし銀の光を放つ太平洋。のどかで心休まる景観が広がっています。

発想転換、採草地に侵入するノシバがヒント

ノシバを活用した牧草地での放牧は、今でこそ各地に普及していますが、安部さんが放牧を始めた平成二年当時は、全国レベルでも数少ない試みだったと思われます。奈半利町で放牧をしたのは安部さんが第一号であり、ましてや水田をノシバで草地化するといった先例もありませんでした。安部さんの独創的な発想は、粗飼料主体でやつてきた給与背景と、土を見る日々の観

察から生まれてきたものです。

安部さんの祖父は、同地域でも名の知れた愛牛家で、飼育方法にも一家言を持つていました。その飼育法とは、

繁殖牛であっても、腹回りや腰回りがどうしりするくらいに粗飼料を食わせること。通常、繁殖牛は肥満すると受胎率が下がることから、できるだけ太らせないようにしますが、上質の粗飼料で肥えた牛は、子宮に脂はつかず、生殖器官の弾力性や収縮性が高まり、受胎率、分娩ともに良好なのだといいます。

安部さんは祖父のやり方を踏襲し、所有する水田一・三haのイナワラのほか、不足分は購入して補い、田の畔の青草も残さず活用してきました。濃厚飼料は、ふすま一kgに米ヌカ三〇〇g、分娩前後に脱脂大豆を四〇〇gほど追加する程度で、繁殖牛に限つて言えば、市販の配合飼料は使つたことがありません。



安部秀雄さん

減反が奨励された昭和四十五年ごろ、飼養頭数が増えたこともあり、現在、放牧地となっている六五aの水田を、畦畔を残したまま採草地に転換します。それから十数年間、イタリアンライグラスやソルガム、エン麦などの牧草を植えていましたが、悩まされたのが畦畔や周辺の山路から侵入するノシバのランナーでした。

ノシバのランナーは、一年間に一mほど伸びる繁殖力を持ちます。水田についたころは、毎年の畔塗りが侵入防止の役目を果たしましたが、防波堤がなくなつた途端、四方八方から忍び寄り、牧草を駆逐する勢いで増え続けます。

採草地においては、ノシバはやっかいな雑草に過ぎません。しかし安部さんは、敵に回すのではなく、その生命力



「牛がノシバを好んで食べること」は、
うと思いつ立ちます。



水飲み場。もとは水田だったところなので、用水路からパイプで導水

「ここはゴルフ場か」ときかれる
ノシバ草地は「牛力」でできた



90aのノシバ草地をつくるのに
植え付けたのは、こんな10cm
ほどのランナー60本だけ

畔の青草を与えてきた経験から、十分に分かつとつた。放牧地をつくって牛を山へ移動させれば、牧草刈りや牛舎に運ぶ手間もなくなると考えたわけだ

昭和六十二年ごろ、ノシバ草地研究で知られる上田孝道氏が、同地域を管轄する家畜保健衛生所に赴任し、交流が始まったこともあり、安部さんの思いは固いものになつていきます。

植えたノシバはわずか六〇本

平成元年の秋、放牧地づくりの準備に入ります。要となる草地は、牧草の刈り取りが終わつた状態で放置しておくだけ。雑草から一転、主役となつたノシバがどんどん増殖してくれるのを待つわけです。牧柵は、周囲五〇〇mほどに一m間隔で杭を打ち込み、有刺鉄線を三段に張つて取り囲みました。また、安部さんは当初から、周年・親子放牧を考えていたため、飼料の備蓄

や子牛の別飼い、発情確認や人工授精を行なう牛舎もつくりました。草地には日陰林などの牛の逃げ場がありません。牛舎の扉は開け放しておき、牛が自由に出入りできるようにしています。

牧柵も牛舎も安部さん一人でつくった労作です。それだけ労力はかかったものの、費用は間伐材や廃材を利用して、一〇万円足らずで完成しました。準備が整った平成二年二月、当時飼養していた六頭の繁殖牛を放牧します。そのときのノシバの状態は、法面や畦畔に密生している程度だったのです。朝と晩の一回ずつ、外から粗飼料を補給しました。

その後、ノシバの広がり具合を見ながら、裸地が目立つところにノシバのランナーを植え付けます。密生しているところから抜いた一〇㌢ほどのランナーを、数センチの穴に植えて土をかぶせ、足で踏みつければ完了。こう

して人工的に植えたノシバは六〇本ほど（ポットではありません！）です。奥さんと二人仕事で半日で終わりました。牛が採食しない雑草は、気がつく度に引き抜きましたが、こちらもさほど手間ではなかったそうです。

リーダー牛を放牧に慣れさせることが肝心

ノシバ草地づくりに欠かせない、もう一方の主役の牛たちは、全頭が放牧未経験です。放牧する一年前には、自家の牛舎わきに広い運動場をつくり、できるだけ外気に触れさせていましたが、舎飼いが長いリーダーの行動が心配されました。

放牧した当初、リーダー牛は、農道そばの牧柵に寄つてきて、しきりに帰りたい素振りを見せます。脱柵を心配した安部さんは、一日三回の見回りの度に、リーダーに声をかけ、体に触り、気持ちを安定させるようにしました。

放牧して二ヶ月も経つと、リーダーは落ち着きを取り戻し、ほかの牛も右へ岱えで環境に慣れたといいます。

景観維持と冬の牧草確保、糞拾いで一石二鳥

放牧を開始して三年目、ノシバは放牧地をあらかた覆い尽くします。南向き斜面で、隅々にまで陽光が行き渡る土地であったことと、もと水田という土壤条件が功を奏しました。放牧地の下には約一五㌢の肥えた表土が堆積しています。その土の上に牛の糞尿で施肥しているわけですから、ノシバの

光合成菌濃厚液製剤 “エコバイオ20L”

- ◎養豚、酪農、養鶏場の悪臭を根本から絶ち環境浄化する
- ◎堆肥高速発酵、減容・無臭化
- ◎糞尿を高速発酵で液肥化し循環有機農法を実現できる
- ◎水田、ハウス栽培、水耕栽培で品質向上、米の食味向上
- ◎驚く安さでどこでも効果のできる必要量を気軽に使える

高立株式会社

東京都中野区南台2-19-1
TEL:(03)3382-2883
FAX:(03)3382-8661



冬の飼料にするイタリアンのスポット牧草地の6月初めの状態。集めておいた糞をときどき投げ込んで肥料に。10月末に再び播種して耕耘。播種後も適度に糞を入れておくと牛は寄り付かない。左隅は手づくりの牛舎

生育には十分過ぎるほどです。

冒頭でも述べたとおり、安部さんの放牧地は、芝刈り機で刈りそろえたと言つてもいい美しさです。その秘密は毎日の糞の処理にあります。安部さんの工夫は、糞のまわりの草を食べないという牛の習性を実によく生かしたものです。美観維持だけでなく、環境対策や計画的な飼料給与にもつながっています。

「〇〇aほどのスポット牧草地があり、イタリアンライグラスが植えられています。草地に落された糞は、毎朝一輪車で集め、いつたん放牧地の隅に堆積します。そして牧草地の糞の分解具合を見ながら、新しいものを投げ込んでいきます。これは肥料になるうえ、牛は糞のそばには二ヶ月くらいは近づかないで、イタリアンの種を十月末に播いた後にも投げ込んでおけば、十二月、一月には採食できる状態に育ちます。

ちょうどその頃、ノシバは寒さで生育が遅れる時期。牛たちは自然に牧草地に集まり、そこで冬場のビタミンが補給できるわけです。

飼料給与はふすま1kgと分娩前後に追加する脱脂大豆四〇〇gは以前と変わらず。放牧によって運動量が増えたので、米又カは五〇〇～七〇〇gに増やしています。また、粗飼料はイナワラとノシバだけで十分なのですが、放牧地の中には、三区画に分かれた

「牛に手をかけたくてしょうがない」
安部さんの性分もあって、以前と同様に田の畔草も与えています。

安部さんが糞を毎日集め、不食可繁（牛に食べられないために繁茂したところ）のない美しい草地にこだわるのは、それなりの事情があります。

南側斜面の下には谷川が流れています。放牧地は農道の側にあり、多くの地域の人たちの目に触れることからも、管理がすさんだと苦情が出てしまっては困る。放牧を続けていくためには、まず地域住民の理解が必要です」
クレームなどは一度も出たことがありません。

ノシバのおかげで畠畔は崩れない、いつでも復田可能

安部さんは以前から、一年一産は確実なものにしていましたが、放牧後もその成績を維持しています。スポット

栽培の面積を差し引くと、約九〇haという草地面積から、今は繁殖牛三頭を放牧しています。

棚田を放牧地に利用する際、いちばん懸念されるのが畦畔や法面の崩壊です。しかし、安部さんの放牧地を見る限り、その心配はありません。放牧地には田の畔や水路の跡が残り、水田だけたころの形を保っています。

「田のアテ（畔）が残っているのは、均等に踏圧がかかっている証拠。縦横無尽にからまつたノシバが、ネットとなりクリッショントなって、畦畔や法面を支える役割を果たしている。牧草やカヤでは、こんな具合にはなりません。水田に復元したいときには、除草剤でノシバを枯らし、水を入れて表土を柔らかくして、トラクターでたたけば容易にできます」

放牧地として半永久的に使えるうえ、再び水田に戻すこともできるのが、ノシバ棚田草地のいちばん優れている

点だと安部さんは言います。

平成四年には、「安部さんの放牧地から一kmほど山手に、「奈半利町肉用牛生産組合」によるノシバ草地造成が行なわれ、数頭の土佐褐毛和種が放牧されています。一haの雑木林を切り開いたこの放牧地は、町役場や農協、農家、東部畜産保健衛生所が一体となって取り組んでいる事業で、整備が完成した折りには、町民の憩いの場として開放される予定です。

奈半利町の繁殖農家は、平成元年の二〇戸から現在は三戸へと激減しています。土佐褐毛和種が町民の目に触れる機会も少なくなりました。生産地としての誇りを失わないためにも放牧は有効であり、また放牧によって新しい活路が開けるのではないかと、安部さんは考えています。